

養育者による“子どもの情動を読み取る能力”のカテゴリー化

－ ビデオ刺激の活用による検証 －

小 原 倫 子
上 嶋 菜 摘

岡崎女子短期大学研究紀要46号 抜粋

平成25年 3 月25日

養育者による“子どもの情動を読み取る能力”のカテゴリー化

— ビデオ刺激の活用による検証 —

小原 倫子* 上嶋 菜摘**

要 旨

本研究の目的は、養育者—子どもの関係性の発達に影響を及ぼすことが考えられる、養育者による“子どもの情動を読み取る能力”（情動認知と、認知する際に使用する手がかり）のメカニズムと発達プロセスについて、新たに作成したビデオ刺激を用いて、養育者による“子どもの情動を読み取る能力”のカテゴリー化を行うことである。その結果、養育者は、乳児の表情や行動、発声といった乳児に焦点化された客観的な情報だけではなく、養育者の内的表象である育児態度や育児信念も手がかりとして情動を認知している可能性が示唆された。

Abstract

The purpose of the present study was to investigate changes in the perception of mothers toward infant emotions and use of context, as such changes are considered important for the development of relationship between mother and child. In the present study, we presented stimuli in video clips to determine mothers' perceptions of infant emotions and use of context, and analyzed our findings in regard to maternal perception and use of context.

Key Words : 養育者—子どもの関係性 子どもの情動を読み取る能力 ビデオ刺激 情動のカテゴリー化

I 問題と目的

従来の養育者の心理的発達における知見の多くは、養育者になることによる主観的意識や自己概念の変化、育児に対する態度や意味づけの変化を明らかにしている（柏木&若松，1994；徳田，2004）。これらの研究は、生涯発達の視点から、養育者の主観的意識としての態度や意味づけの変化に焦点が当てられており、子どもとの相互作用の中で生じられる養育者の変化そのものの検証は十分ではない。

Emde&Sorce（1988）は、特定の情動に関する明確な仕種がない新生児に対しても、日常的な文脈を基にして乳児の情動を読み取る養育者の応答性は、養育者—子ども間の共感的過程に貢献すると述べている。養育者が子どもとの相互作用の中で子どもの情動をどう認知し、どのように解釈するかという認知的能力は、その後の子どもへの応答行動に大きな影響を及ぼすことが推測される。それ故、発達初期の不確かな情動表出を示す乳児の情動を、養育者がどう認知し、その後の応答行動をどのように行っていくかについて明らかにすることは、安定した養育者—子ども関係のための重要な要因である。しかし

ながら、これまでに日常的な文脈における養育者の情動認知と応答行動の発達に関する研究はあまり見られない。

一方、養育者の情動認知や応答行動が、子どもの発達に影響を及ぼすという報告がある（Hsu&Fogel, 2003）。子どもの発達への影響という視点からも、養育者の情動認知と応答行動の発達プロセスの検証は必要である。更に、養育者による乳児の情動認知は育児困難感と関連し、養育者の育児態度を方向づける可能性が示唆されている（小原，2005）。このように養育者—子ども間の様々な側面に影響を及ぼす可能性が考えられる養育者の情動認知に関して、養育者は乳児の表情だけではなく、文脈を利用して認知し、解釈していることを示す報告も見られる（Tronic&Brazelton, 1980）。しかしながら、養育者が母子相互作用を取り巻く文脈のどの部分に着目し、子どもの情動を読み取っているのかに関する測定方法及び実証的研究は十分とはいえない。

そこで、本研究では、養育者による子どもの情動を読み取る能力を測定するために作成したビデオ刺激を用いて、養育者の情動認知と認知する際の手が

* 岡崎女子短期大学幼児教育学科

** すくすくクリニック

かりとして、文脈をどのように利用するかについて詳細な検証を行い、カテゴリー化することを目的とする。

II 方法

本研究では、統制され、かつ日常的な文脈に根ざした乳児のビデオ刺激を作成し、それをを用いて養育者による子どもの情動を読み取る能力を測定した。従来、養育者による子どもの情動を読み取る能力の測定には以下の2つの方向性に基づく方法が検証されてきた。1つは養育者と養育者自身の子どもの相互交渉を利用する方法である。Maternal Insightfulnessの概念を提唱しているOppenheim & Karen-Karie, N (2002)は、養育者自身の子どもの相互交渉場面を録画したVTRを測度として、子どもの思考や感情についてインタビューを行い、その内容に基づき母親の情動認知のタイプを4つのグループに分類している。他の方法としては、写真や音声といった統制された刺激に対する応答から養育者の情動を読み取る能力が検証されている。Emde, Osofsky & Butterfield (1993)は、養育者-子ども間における、乳幼児の情緒表現への気づきと共感的な反応、及び養育者の情緒表現の提供という一連の応答能力を表す emotional availabilityを把握するために、前後の状況が明らかではない、乳幼児の表情写真を通して養育者が、乳幼児の情動をどのように読み取るかを把握するIFEEL Pictures: Infant Facial Expression of Emotional from Looking Picturesを測度として利用している。

しかしながら、養育者自身の子どもの相互交渉を利用する方法では、子どもの特性が養育者の子どもの情動を読み取る能力に影響を及ぼすため、養育者の特性が把握されにくい可能性が考えられる。また、統制された刺激では、養育者が子どもの情動を読み取る際の手がかりが制限されており、日常的な文脈での養育者-子ども間における情動の読み取りとは異なる可能性が考えられる。

以上の課題から、子どもの特性に左右されず、養育者の特性としての、子どもの情動の読み取り能力を把握することが可能な測定方法の作成が必要である。そこで、本研究では、養育者自身の子ども以外の養育者-子どもの日常的な文脈に依拠する自然な相互交渉場面で構成されている、統制されたビデオ刺激を作成し、養育者による子どもの情動を読み取る能力の検証を行った。

(1) ビデオ刺激の作成

本研究では、統制され、かつ日常的な文脈に根ざした場面で構成されている、9か月児を対象とした15秒のビデオ刺激10本を作成した。それらのビデオ刺激に対して、乳幼児を育児中の養育者14名を対象に予備調査を実施し、情動表出の程度と快・不快の程度について評定を依頼した。表出及び快・不快の程度の高低、分散を考慮して最終的にPositive、Negative、Neutralの様々な子どもの情動が幅広く含まれていることが確認されたビデオ刺激10本を本調査でも使用した。ビデオ刺激の内容はTable 1に示す通りである。

(2) 調査対象者

愛知県内の保健センターの離乳食相談会と保育園の0-1歳児クラスにおいて調査協力者を募集した。研究目的と、プライバシーの保護についての説明を行い、同意書による同意が得られた子育て中の養育者31名を対象とした。子どもの月齢の平均は11.7カ月(SD=4.7)であった。第一子25名(男子11名、女子14名)、第二子6名(男子5名、女子1名)。養育者の平均年齢は30.7歳(SD=3.7)であった。

(3) 手続き

作成したビデオ刺激を使用して個別に半構造化面接を行った。面接場所は、対象となる養育者の自宅及び協力を依頼した施設で行われた。パソコンの画面にビデオ刺激を1本目から10本目まで順に提示し、質問①⇒質問②の順番で面接を実施した。得られた回答は対象者の同意を得たうえでICレコーダーで録音し、それに基づいて逐語記録を作成した。逐語記録はKJ法(川喜多, 1967; 1970)を用いて分析を行った。質問の内容を以下に記載する。

質問①(乳児の情動を尋ねる質問)

「赤ちゃんはどのような感情状態だと思われますか？」

質問②(情動の読み取りに母親が用いる手がかりを尋ねる質問)

「そのような感情状態と思われたのは、どのようなところからですか」

III 結果と考察

質問①②の回答を、KJ法により、第一著者、心理学を専門とする短大講師1名、保育を専門とする短大助手の計3名の評定者により、合意が得られるまで類型化を行った。その結果、質問①(乳児の情動

Table 1 ビデオ刺激の内容：（上嶋&小原，2010）から引用

クリップ名	クリップの内容
クリップ 1	低い棚に片手をかけてひざ立ちをしている。カメラの方を見てから視線を床に向けた後、手をかけていた棚へ体ごと向ける。カメラに脊を向けたまま、お尻を上下に動かして「わーわー」と声を出す。最後に、再びカメラへ顔を向けて「ブブー」と唇を鳴らす。
クリップ 2	カメラと向かい合って歩行器に乗っている。手を振ってから顔を下に向け、横へ移動していく。すぐに止まって、顔を上げてカメラを見た後、徐々に下を向いていく。
クリップ 3	初めは上半身を起こして周囲を見回しながら泣いているが、次第に顔を床にこすりながら泣き続ける。周囲には玩具が散らかっている。
クリップ 4	布製の絵本を持って歩行器に乗っている。片手で本を持ったり両手で持ったりして、手を動かし続けている。四宣は本と自分の手先を向いている。
クリップ 5	手に持った玩具を斜め後ろの床に置いてある別の玩具に何度もぶつけている。時折、手に持っている玩具を正面に持ってきて見たり、口元へ持っていったりしている。
クリップ 6	母親の斜め向かいの位置に座っている。片手で持って振っているペットボトルが別の物に当たって音がすると笑う。母親に声をかけられるとペットボトルを再び振り始め、音がすると母親に笑顔を向ける。母親を見た後に、ペットボトルをじっと見つめ、また振り始める。
クリップ 7	母親と向い合せに座っている。振ると音が鳴る玩具を両手に持って一人でぶつけている。母親が子どもの持っている玩具へ同じ玩具を「乾杯」と当てることを繰り返すと、子どもは左手を母親の方へ出す。
クリップ 8	母親の横隣で立っている。母親は紙風船を繰り返し叩きながら子どもの名前を呼んで遊びに誘っている。子どもは立ったままカメラを見たり、手で顔をこすったりし、母親の方は見ていない。
クリップ 9	母親の横隣で座っている。子どもはプラスチックのコップを持って母親の方へ体を向ける。母親は子どもが向いた方であったタッパーを子どもの正面に置く。子どもがタッパーに手を伸ばすと、母親はタッパーを裏返す。子どもはタッパーとは違う物を手に取って引き寄せる。背景には童謡が流れている。
クリップ 10	左手を母親の足に置いたまま、右手を玩具へのばして持ち上げる。右手で持った玩具から音が鳴るとすぐに手放す。母親が音を鳴らせてみせると、再び母親の手から玩具を取って振り始め、音が鳴ると笑う。カメラマンを見ると笑顔がなくなり、玩具を落として両手を母親へ伸ばす。

を尋ねる質問)「赤ちゃんはどのような感情状態だと思いますか?」に対する回答からNegativeな情動が6 カテゴリー、Positiveな情動が11カテゴリー、Neutralな情動が7 カテゴリー、生理的欲求が3 カテゴリー、その他1 カテゴリーの計28カテゴリーが生成された。カテゴリーの詳細をTable 2 に示す。

次に、質問②(情動の読み取りに母親が用いる手がかりを尋ねる質問)「そのような感情状態と思われたのは、どのようなところからですか」に対する回答から客観的に観察可能な文脈が8 カテゴリー、養育者の主観的な認知が6 カテゴリーの計14カテゴリーが生成された。生成されたカテゴリーの詳細をTable 3 に示す。

Table 2 養育者によって読み取られた、子どもの情動カテゴリー

Negative な情動	悲しみ	怒り	辛い	恐怖	不満	不安					
Positive な情動	楽しい	挑戦	安心	得意	期待	夢中・集中	興味	欲求	意志	思考	発見
Neutral な情動	無関心	呆然	依存	葛藤	驚き	緊張	退屈				
生理的欲求	空腹	暑さ	寒さ								
その他	分類不可										

Table 3 養育者が子どもの情動の読み取りに利用する文脈カテゴリー

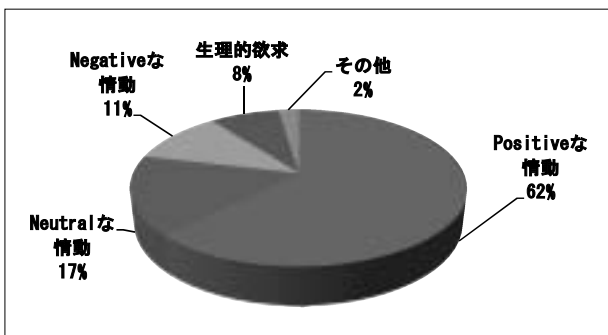
客観的に観察可能な文脈	養育者の主観的な認知
・ 乳児の行動	・ 乳児の心的状態
・ 乳児の発声	・ 養育者の育児経験
・ 乳児の表情	・ 養育者の育児信念
・ 乳児の注視	
・ 乳児の泣き	
・ 養育者の行動	
・ 母子相互作用	
・ 環境	

(1) 養育者によって読み取られた子どもの情動カテゴリー

養育者による子どもの情動の読み取りは、多義にわたることが推測された (Figure 1)。育児の状況に対する現実知覚=評価様式は育児ストレスに影響し (氏家, 1994)、養育者による子どもの情動の読み取り様式が育児困難感に影響する (小原, 2005) ことが示唆されている。

本研究から得られた情動カテゴリーに基づき、養育者が、Positive、Negative、Neutral及び子どもの空腹や眠い、排泄といった生理的な欲求のどの情動に多く焦点づけられているかという特性と、実際の養育者の応答行動や育児ストレスとの関連について、質的な分析及び検証が、今後必要であると考えられる。

Figure 1 養育者によって読み取られた子どもの情動カテゴリーの出現率



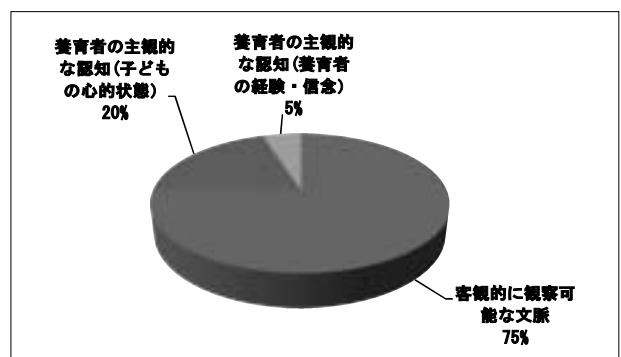
(2) 養育者が子どもの情動の読み取りに利用する文脈カテゴリー

養育者が子どもの情動を読み取る際に、客観的に観察可能な文脈だけでなく、養育者の子どもの心的状態に関する主観的な認知と養育者自身の内的表象である育児態度や育児信念も手がかりとして利用している可能性が示唆された (Figure 2)。

Oster et al (1992) によると、乳児の情動は明確な事象との有意味なつながりを持たない、あいまいなものであることが指摘されている。それにもかかわらず、養育者たちの多くは、生後1ヶ月の乳児にも多くの情動を仮定することが示唆されている (Johnson, 1982)。養育者は主観的な認知を利用することで、初期の母子相互作用における子どもの情動を認知している可能性が考えられた。また、子どもの情動表出は、発達に伴い事象との関連が明確になり、客観的に観察されやすくなることから、養育者の利用する手がかりも主観的な認知によって得られるものから客観的な観察によって得られるものへと経時的に変化していくことが推測される。一方育児経験という内的表象に着目した場合、育児の経験を重ねるにつれ、利用できる主観的な認知が多くなる可能性も否定できない。

これらの課題の検証も含め、今後は本研究で得られたカテゴリーを用いて、発達早期からの短期間、反復的なマイクロ的視点による研究デザインで詳細な検証を行い、基礎的なデータ収集と分析を行うことが必要である。それらのデータから、養育者による子どもの情動認知と認知する際に使用する手がかりの発達のプロセスを明らかにし、養育者の応答行

Figure 2 養育者が子どもの情動の読み取りに利用する文脈カテゴリーの出現率



動や育児ストレス、子どもの発達との関連を検証し、臨床的な応用へとつなげていきたい。子どもの要求や意図がわからないために育児不適応を生じている母親に対して、適応的な子どもへの関わり方を体験的にトレーニングできる発達プログラムの開発への応用が今後の課題である。

謝 辞

本研究の実施にあたり、もみじ保育園の水野照久園長はじめスタッフの皆様、調査にご協力をいただいたご家族の皆様に心から感謝致します。

文 献

- Emde, R. N., Osofsky, J. D., & Butterfield, P. M. (Eds.). (1993). *The IFEEL Pictures: A New Instrument for Interpreting Emotions*. Connecticut: International Universities Press, Inc.
- Emde, R. N., & Sorce, J. F. (1988). 乳幼児からの報酬：情緒応答性と母親参照機能. (小此木啓吾, 監訳) 乳幼児精神医学 (pp.25-48). 東京：岩崎学術出版社. (Emde, R. N., & Sorce, J. F. (1983). *The rewards of infancy: Emotional availability and maternal referencng*. In J. D. Coll, E. Galenson, & R. L. Tyson (Eds.), *Frontiers of Infant Psychiatry*. New York: Basic Books.)
- Hsu, H., & Fogel, A. (2003). Stability and transitions in mother-infant face-to-face communication during the first 6 months: a microhistorical approach. *Developmental Psychology*, 39, 1061-1082.
- Johnson, W., Emde, R. N., Pannabecker, B., Stenberg, C., & Davis, M. (1982). Maternal perception of infant emotion from birth through 18 months. *Infant Behavior and*

Development, 5, 313-22.

- 柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達-生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5 72-83.
- 小原倫子. (2005) 母親の情動共感性音日情緒応答性と育児困難感との関連. 発達心理学研究, 16, 92-102
- Oppenheim, D. & Koren-Karie, N. (2002). Mother's insightfulness regarding their children's internal worlds: The capacity underlying secure child-mother relationship. *Infant Mental Health Journal*. 23, 593-605.
- Oster, H., Hegley, D., & Nagel, L. (1992). Adult judgements and fine-grained analysis of infant facial expressions: Testing the validity of a priori coding formulas. *Developmental Psychology*, 44, 1115-1131.
- 徳田治子 2004 ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ-生涯発達の視点から 発達心理学研究, 15, 13-26.
- Tronick, E. Z., Als, H., & Brazelton, T. B. (1980). Monadic phases: a structural descriptive analysis of infant-mother face-to-face interaction. *Merrill-Palmer Quarterly of Behavior and Development*, 26, 3-24.
- 上嶋菜摘・小原倫子 2010 母親が乳児に対する“かかわり”において着目できる手がかり 乳幼児医学・心理学研究, 19 (1), 49-60.
- 氏家達夫・高濱裕子 1994 3人の母親-その適応過程についての追跡的研究 発達心理学研究, 5, 123-136.

注1) 本研究は、第1著者に対する文部科学省平成20年度科学研究費補助金(基盤研究(C), 課題番号: 20530614)の助成を受けて実施されたものである。